

実数値関数の例 (メモ) (大島利雄)

1. 次を満たす偶関数を考える.

$$\phi(t) \in C^\infty(\mathbb{R}), \phi(t) \begin{cases} \geq 0 & (t \in \mathbb{R}), \\ = 0 & (|t| \geq 1) \\ = 1 & (|t| \leq \frac{1}{4}) \end{cases} \text{ and } \int_{\mathbb{R}} \phi(t) dt = 1.$$

任意に与えた数列 $a_0, a_1, a_2, \dots \in \mathbb{C}$ に対し

$$f(x) := \sum_{\substack{n \geq 0 \\ a_n \neq 0}} a_n \int_0^x \int_0^{t_1} \cdots \int_0^{t_{n-1}} \phi(|a_n| t_1) dt_1 \cdots dt_{n-1} \in C^\infty(\mathbb{R})$$

とすると, $f(x) \in C^\infty(\mathbb{R})$ は $f^{(n)}(0) = a_n$ ($n = 0, 1, 2, \dots$) を満たす.

注. $C \int_{-\infty}^{\infty} \phi(Ct) dt = 1$ ($C > 0$), $\left| f^{(n)}(x) - \sum_{k=0}^n a_k |a_k|^{n-k} \phi^{(n-k)}(|a_k|x) \right| \leq e^{|x|}$ に注意.
 C^∞ 級関数

$$\varphi(x) = \begin{cases} e^{x^2-1} & (|x| < 1) \\ 0 & (|x| \geq 1) \end{cases},$$

$$\Phi(x) = \int_{-\infty}^x \varphi(t) dt,$$

$$\Phi_c(x) = \frac{\Phi(cx)}{\Phi(1)} \quad (c > 0)$$

に対し, $c \geq 4$ のとき $\phi(x) = \Phi_c(\frac{1}{2} + x) \Phi_c(\frac{1}{2} - x)$ は 1 の条件を満たす.

Fact. 複素数列 a_0, a_1, \dots を任意に与えたとき. $\Omega := \{re^{i\theta} \mid 0 < r < 1, -\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{3\pi}{2}\}$ で正則な関数 $F(z)$ で, $f(x) := F|_{(-1,1) \setminus \{0\}}$ は $(-1, 1)$ 上の C^∞ 級関数に拡張され, $f^{(n)}(0) = a_n$ ($n = 0, 1, 2, \dots$) となるものが存在する.

2. 以下で定義される関数 $F(x) \in C^\infty[0, 1]$ は狭義単調増加で, $\{x \in [0, 1] \mid F(x)' = 0\}$ は (正の Lebesgue 測度を持つ) 無限集合.

$$H(x) := \sum_{n=2}^{\infty} \sum_{k=0}^{2^n-1} 4^{-n^2} \varphi(4^n(x - \frac{k}{2^n})),$$

$$F(x) = \int_0^x H(t) dt.$$

逆関数は狭義単調増加連続関数であるが, 微分できない点の集合の測度は正.

$I_{n,k} := \{x \mid \varphi(4^n(x - \frac{k}{2^n})) > 0\} = (\frac{k}{2^n} - \frac{1}{4^n}, \frac{k}{2^n} + \frac{1}{4^n})$ で, $|I_{n,k}| = \frac{2}{4^n}$.
 $|I_\infty := \bigcup_{n=2}^{\infty} \bigcup_{k=0}^{2^n-1} I_{n,k}| = 2^2 \frac{2}{4^2} + \sum_{n=3}^{\infty} 2^{n-1} \frac{2}{4^n} = \frac{3}{4}$ (ここで, $I_{n+1,2k} \subset I_{n,k}$ に注意). $I_\infty \setminus [0, 1] = (-\frac{1}{16}, 0)$ であるから, $\{x \in [0, 1] \mid F(x)' = 0\}$ の測度は $\frac{5}{16}$ となる. なお, $F'(x) > 0$ を満たす $x \in [0, 1]$ は $[0, 1]$ で稠密にある. なお, $F'(0) = \sum_{n=2}^{\infty} 4^{-n^2}$, $F'(1) = 0$.

注. $[0, 1]$ 上の単調増加関数の不連続点はたかだか可算個である.

3. 次の関数 $f(x)$ は C^∞ 級であるが, C^ω 級となる点はない.

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} e^{2^n(2^n x \sqrt{-1} - 1)}$$

注. $f(x + \frac{2\pi k}{2^m}) - f(x)$ ($m \in \mathbb{Z}_{>0}$, $k \in \mathbb{Z}$) は有限 Fourier 級数なので整関数. よって, $f(x)$ がある点で C^ω なら, \mathbb{R} 上で C^ω .

一方, $\sum_{n=0}^{\infty} e^{-2^n} z^{4^n}$ の収束半径は 1 ($z = e^{\sqrt{-1}x}$).

4. 関数

$$F(x) = \begin{cases} x^3 \cos \frac{2\pi}{x^3} & (x \neq 0) \\ 0 & (x = 0) \end{cases}$$

は, 各点で微分可能なので, その導関数を $f(x)$ とおく. (次項の関数 $h(x)$ の導関数でもよい) $f(x)$ は不定積分 $F(x)$ を持つので (高校数学の意味で)

$\int_{-1}^1 f(x) dx = 2$ が分かる. 一方, $f(x)$ は $[-1, 1]$ 上有界でないので Riemann 積分不可能.

微分可能関数

$$\tilde{F}(x) = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-2n} F(x - \frac{1}{2^n})$$

の導関数の不連続点は可算無限個で, その近くで有界でない.

5. $\varphi_1(x) := -\frac{1}{2}\varphi'(x) \in C^\infty(\mathbb{R})$ とおくと (または, $\varphi_1(x) = x\phi(x)$)

$$\varphi_1(0) = \varphi_1(\pm 1) = 0, \quad \varphi_1'(0) = 1, \quad |\varphi_1(x)| < 1, \quad \varphi_1(x) = 0 \quad (|x| \geq 1),$$

$$h(x) := 1 + \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-2n} \varphi_1(2^{3n+1}(x - \frac{1}{2^n})),$$

$$h'(0) = 0, \quad h'(\frac{1}{2^n}) = 1, \quad h'(\frac{1}{2^n}) = 2^{n+1}$$

を満たす. そこで各点で微分可能な関数 $h(x)$ に対し

$$a_0 = 1, \quad a_{n+1} = a_n - \frac{h(a_n)}{h'(a_n)}$$

とおくと (ニュートン法), $a_n = \frac{1}{2^n}$ となり, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$ であるが, $h(0) = 1$.

注. $\{x \in \mathbb{R} \mid \varphi_1(2^{3n+1}(x - \frac{1}{2^n})) \neq 0\} \subset I_n := (\frac{1}{2^n} - \frac{1}{2^{3n+1}}, \frac{1}{2^n} + \frac{1}{2^{3n+1}})$.
 $I_m \cap I_n = \emptyset$ ($0 \leq m < n$), $|h(x)| < (2^{-n})^2$ ($|x| \leq 2^{-n}$).

6. $x \in [0, 1]$ を 2 進小数で表す. 2 進有理数の時は有限小数で, それ以外は無限小数で表すとすると, 表示は一意に決まるが, それを 10 進小数として読んだ値を $f(x)$ とおく. $f(x)$ は明らかに狭義単調増加関数となる. このとき

$\int_0^{\frac{1}{3}} f(x) dx$ を求めよ. 単調増加なので, (Riemann) 積分が計算できる.

ヒント. $\frac{1}{3}$ を二進法の無限小数で表すとどうなるか?

7. $[0, 1]$ 上の次の関数 $f_n(x)$ ($n = 0, 1, \dots$) を考える.

$$f_n(x) = \begin{cases} 1 & (\sin 2^n \pi x \geq 0) \\ 0 & (\sin 2^n \pi x < 0) \end{cases}.$$

(1) $f_n \in [0, 1]^{[0, 1]}$ であるが, 空間 $[0, 1]^{[0, 1]}$ はチコノフの定理から直積位相でコンパクトとなる. この直積位相は, $[0, 1]$ 上の関数に対する各点収束の位相に他ならない.

$f_\infty \in [0, 1]^{[0, 1]}$ を関数列 f_1, f_2, \dots の集積点の一つとする.
 f_{n_1}, f_{n_2}, \dots を f_∞ に収束する部分列とすると

$$\lim_{j \rightarrow \infty} f_{n_j}(x) = f_\infty(x) \quad (\forall x \in [0, 1]).$$

よって, ルベークの収束定理から

$$\lim_{j \rightarrow \infty} \int_0^1 |f_\infty(x) - f_{n_j}(x)| dx = 0.$$

一方

$$\int_0^1 |f_i(x) - f_j(x)| = \frac{1}{2} \quad (i \neq j).$$

問. f_∞ の例を一つあげよ.

(2) $[0, 1]$ で離散位相を考えると, 局所コンパクトな空間 $[0, 1]$ 上の関数 f_1, f_2, \dots は同程度連続, 一様有界な関数列となる. アスコリアルツェラの定理が適用できるとすると, 収束する部分列を持つ.

8. $f(x)$ は $f(0) = 0$ を満たす $[-1, 1]$ 上の実数値 C^ω 級関数で

$$f(x) > 0 \quad (0 < |x| \leq 1)$$

を満たすとする. このとき

$$f(x) \geq C|x|^m \quad (|x| \leq 1)$$

満たす $C > 0, m > 0$ が存在する.